

津輕領の青森灣に面する磯山なる乎、日本海又は北海道に面する海岸の磯山なる歟不明である。磯山とは地名にてはなく浦人が磯の山に登りて海原を眺望せし意味らしく地圖にも見當らず。郡名か村名にても記載しあらば一層確實ならむと覺ゆ。併し鼠の下腹の白くして頭と背通りの赤きと云ふことを記しある爲、其鼠の何種なる哉を略想像し得らるゝ丈面白し。又右と事實は少しく異なれども失張ハカネズミに關する面白き通信があるから序前に記載し置く。

山形縣最上郡庄内附近豊田村に於て明明三十五年五月一日より八日間程家猫の該鼠を捕獲し來るもの約二千頭に達せし中にて當時其一頭を醫學士北島小太郎氏より寄贈せられしことあり。

豊田村附近に該鼠の俄に繁殖せしことは思れず是亦他より移動し來れるものと察せらる。特に季節か延寶七年四月と明治三十五年五月と幾んど同じ時期なるより考ふるに、奥羽地方に於ては昔も今も初夏の候に該鼠の大群をなして移動することあるにあらざる歟。(波江元吉)

●フグの一習性 フグの膨るゝは人々の知る處にて之れは空氣を食道に吞み込み體を増大して、他の攻撃者を威嚇するものなりと、多くの書物には説明せり。ジョーダン及ケログ兩氏共著の『アニマルライフ』第百三十四頁を見れば、フグが倒になり、膨れて海面に浮べる圖あり。然れども余は之を以て單に架空の想像説ならずや

と疑ふものなり。吾人がフグを陸上に拉し來らばフグは空氣を吞みて、俄に増大するも、海中にありて果して斯の如き事ありや。上記の『アニマルライフ』には次の如く記せり。曰く『斯の如き魚(フグを指す)を脅さば、海面に浮びて、忽ち空氣を吞み、腹を上方にして、浮ぶなり。斯の如くせば、人には捕へらるゝことあるも、他の魚より免るを得るものとす』と。フグは海岸附近に饒産するも、自然状態に於て斯の如き動作をなせる事あるは吾人の見ざる處なり。甚しきは『海中にありて空氣を吞みて膨るゝもの』と説明せる人あれども、是れ甚しき牽強附會の説にて、到底不可能事に屬す。之を初めて余に告げられたるは學友木下君なりしが余は其反駁の至當なることを感ずるものなり。古き書物にもフグは海中にありて如何にして膨るゝものなるやを怪めるものあり。或は空氣の代りに水を吞みて膨るゝに非ずやと疑へる人あり。余はフグが陸上にありて何故に膨るゝやを解するに苦む。世には斯の如く説明し易きが如くして、實際説明し得ざるものあり。動物の習性を充分に知らずして説明を與ふるの危険なる此の一例にても知るを得べし。

(田中茂穂)

●蟻の種數 現今知られて居る蟻の種數は二千五百であるが、某博士の少年雜誌に書かれたるものにあつたが、吾人の知る處とは多少差があるやうなので調べて見た。LINNEの Systema Naturae には蟻は一屬で僅か十

八種記されたに過ぎないと云ふ事である。一八六三年に Roger の書いた Verzeichniss der Kermisiden (Faltungen und Arten) は當時知れて居た全體の目録を書いたのであるが其には千百三十五の名がある。一八九三年出版の Dalla Torre の Catalogus Hymenopteriorum は従來記された學名は皆擧げてあつて、不確かな消してもよいやうなものも含んで居るが、今其内から確かな者のみを拾ひ出して算て見ると、種が二千三百五十許、變種が二百十五許、合して二千五百餘になる。前に擧げたのは此數に近いが、其以來多數の種が記載されたから、此の數を以て現在知られて居る數とは云へない。

一九一〇年に出た Wheeler の名著 Ants の中に種・亞種變種の數は約五千であると書いてある。又同年に出た Forel の論文 Apery sur la distribution géographique et la phylogénie des Formis には種及び亞種は約五千で、變種は千二百五十だと云つて居る。此の差は學者の考にもよるであらふが又 Wheeler のは一九〇八年までに出版されたものに據つたので小差があるのであらふ。兎に角二千五百種と云ふのは二十年許前の事で今は約六千である。近々二十年間と云つても蟻學の方面では非常な進歩をしたので、生態の方の學說などは可なり變化して來て居る。二十年前の智識を其儘現在のものとして語つては非常な誤を流す事になる。

又或論者は前の數には種と亞種とを含んで居るではな

いか、種ばかりであつたら五千はあるまいと云ふかも知れないが、茲に云ふ亞種と云ふのは純粹の蟻類専門家が用いて居る亞種であつて是等の亞種は例へば Bingham の如き他の昆蟲の分類もやる人は凡て特別の種として居る、否變種すらも時には一個の種として居るものがあるのであるから、他の昆蟲學者の眼から見たらば少くとも亞種は種として算すべきである。(矢野宗幹)

● **ゾエア期幼蟲の温覺** シュミットが『エーレンマイエル』氏壇に廿五乃至卅度の温水を充たし此の上に取り付けた冷却器中の水温を十八度に保つて置いて實驗した所、甲殻類のゾエア期の幼蟲は他の諸動物に於けると同じく温度の限界に來るや否や忽ち勢よく上方に昇るのが見られた。これで該幼蟲に温覺がある事が了解せられる。(寺尾新)

● **ウバザメ** ウバザメと稱するは *Cetorhinus maximus* なるが、日本の近海にも見るを得るとは従來聞ける處なれども、余の寡聞なる未だ一回も見たる事なかりき。此魚は寒帯及亞寒帯に棲み、太平洋及大西洋に共に來るものにて、歐米の北方にては決して珍らしきものに非ず。去る四月二十五日伊豆加茂郡北川沖にて採れたるものは比較的大形のものなるを以て次に其全長を掲げ置く可し。

- 全長 (尾鰭を) 五米二十四厘。
- 全長 (尾鰭を) 六米五十九厘。

(雜 錄) ○ゾエア期幼蟲の温覺 ○ウバザメ